

学びのR

No. 4 4 (令和3年3月)
 埼玉県教育局南部教育事務所
<https://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/g2201/index.html>

「R」は「reform（改革）」の頭文字です

*** 非認知能力について理解を深めよう ***

* 今回は、「非認知能力」について考え、日頃の授業や学級経営などで、どのように育成していけばよいかについて考えます。

「非認知能力」とは何だろうか？

今回は、主に「埼玉県学力・学習状況調査」の調査報告書から「非認知能力」に焦点を当てます。

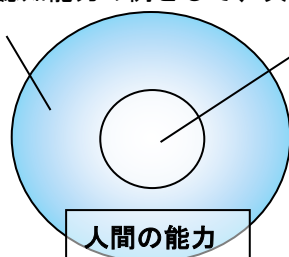


埼玉県マスコット「コバトン」

埼玉県では、埼玉県学力・学習状況調査で測っている非認知能力の例として、次のように挙げています。

非認知能力 認知能力ではない能力全般

例えば、
 自制心（イライラしない、心の平静を保てる）
 自己効力感（自分への自信、自己肯定感）
 勤勉性（やるべきことをきちんとやる）
 やり抜く力（粘り強い、根気がある） など

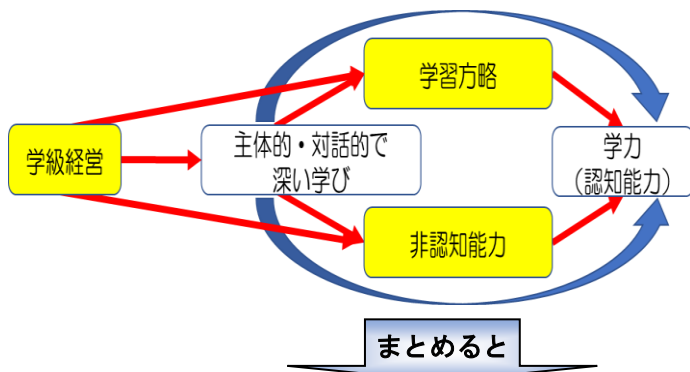


認知能力 いわゆる学力

例えば、
 たし算、漢字の読み書き、
 文章題、図形の把握ができる力 など

「非認知能力」と「学級経営」はどのような関係があるの？

調査の分析により、以下のことがわかってきました。



「主体的・対話的で深い学び」の実施に加えて、「学級経営」が、子供の「非認知能力」「学習方略」を向上させ、子供の学力向上につながる。

主体的・対話的で深い学びは、子供たちの「非認知能力」や「学習方略」の向上を通じて、学力を向上させる。

「学級経営」が、「主体的・対話的で深い学び」の実現や、子供たちの「非認知能力」「学習方略」の向上に重要である。

「学級経営」がよいほど、①「主体的・対話的で深い学び」が実現しやすい。
 ②子供たちの「非認知能力」「学習方略」の向上につながる。

そのほかに「非認知能力」に関連することを教えて？

「主体的・対話的で深い学び」と「非認知能力」とはどのような関係があるの？

主体的に学習課題と向き合い、他者と協働して取り組むことにより、相手意識を生みだしたり、学習活動のパートナーとしての仲間意識を生み出したりします。その中で、向上したことや学び方の良さを確認・実感し、自己を客観的に振り返ることで、「勤勉性」や「やりぬく力」などの非認知能力を育成していくことが期待されます。

「非認知能力」を育成するには、どのような声掛けが効果的なの？

これからの教師には、「子供一人一人の学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者」としての役割が期待されています。県学調の「活用リーフレット」では、「指示よりもお願いと感謝を心がけた」、「『なぜ～だろうか』と、疑問形式の課題を設定した」「教員の声かけに対する生徒の変容の視点から見るようにした」などの事例を紹介しています。

時には、授業規律を維持するため、厳しい指導も必要なのでは？

他の児童生徒の学習を妨げたり、学校や学級の約束を守らなかったりした際には「悪いことは悪い」と伝えることも必要です。しかし、児童生徒の行動の背景に目を向け、「自制心」や「自己効力感」などの非認知能力を児童生徒が自発的かつ主体的に自己を成長させていけるような状況や仕組みを作り出すことが重要です。

どのような質問項目で「非認知能力」がわかるの？

例えば、このような項目で、「非認知能力」を測定しています。※令和元年度質問紙調査の例 ※（ ）は調査学年

自制心（小4、中1）	自己効力感（中2）	勤勉性（中3）	やり抜く力（小6）
①授業で必要なものを忘れた。 ②他の子たちが話をしているとき、その子たちのじゃまをした。 ③机・ロッカー・部屋が散らかっていたので、必要なものを見つけることができなかった。 ④家や学校で頭にきて人やものに当たった。 ➡自制心が「低い」様子	①授業ではよい評価をもらえるだろうと信じている。 ②授業で教えてもらった基本的なことは理解できたと思う。 ③先生が出した一番難しい問題も理解できると思う。 ④授業の難しさ、先生のこと、自分に実力のことを考えれば、自分はこの授業でよくやっているほうだと思う。 ➡自己効力感が「高い」様子	①ものごとは楽しみながらがんばってやります。 ②自分がやるべきことはきちんと関わります。 ③宿題が終わったとき、ちゃんとできたか何度も確認をします。 ④何かを始めたら、絶対に終わらせなければいけません。 ➡勤勉性が「高い」様子	①興味を持っていることや関心のあることは、毎年変わります。 ②少しの間、ある考えや計画のことで頭がいっぱいになっても、しばらくすると飽きてしまいます。 ③何事にもがんばる方です。 ④始めたことは何でも最後までやり遂げます。 ➡やり抜く力が「高い」様子

「非認知能力」は、どのように育成するの？

令和元年度に実施された調査の分析結果を見てみましょう。



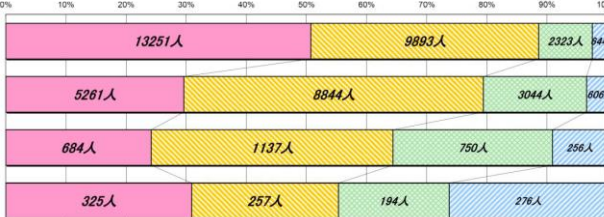
学習規律の定着があり、児童生徒同士のトラブルが少ないなど、落ち着いた学級づくりを実現している学校が学力や非認知能力を伸ばしています。

例 自己効力感

□している □どちらかといえば、している □どちらかといえば、していない □していない

縦軸カテゴリ
学校の先生たちは自分のよいところを認めてくれましたか。

横軸カテゴリ
難しいことでも失敗を恐れなくて挑戦していますか。



小学校4年
 認めてくれた
 どちらかといえば、認めてくれた
 どちらかといえば、認めてくれなかった
 認めてくれなかった

子供たちは自分の努力やよさを認められたり、ほめられたりすることによって、自己効力感や自信を高めていきます。

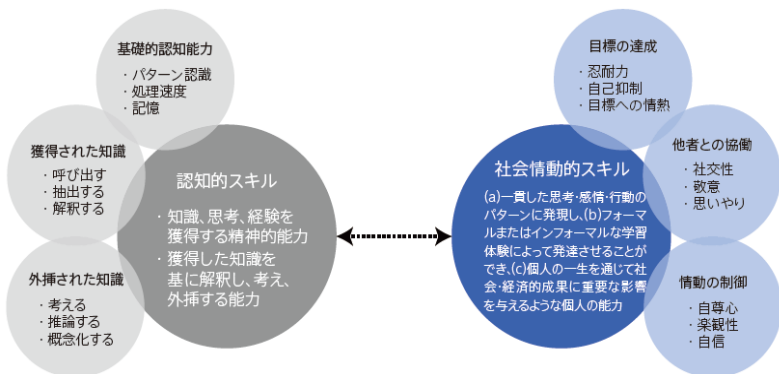


- 一人一人の子供に自信を持たせる言葉かけを、継続的に行いましょう。
- 子供が挑戦したときに、結果だけでなく過程を振り返らせたり認めたりして、次につなげる意識を持たせることが大切です。

一口メモ
OECDの考える「非認知能力」

経済協力開発機構（OECD）による2015年の発表では、認知的スキルの対となるものを、社会情動的スキル(social and emotional skills)としています。

更に細かく見ていくと、「目標の達成」（忍耐力・自己抑制・目標への情熱等）、「他者との協働」（社交性・敬意・思いやり等）、「情動の制御」（自尊心・楽観性・自信等）としています。また、能力(abilities)ではなく、スキル(skills)としていくところも興味深いところです。ちなみにOECDでは、「スキルとは、生産性、測定可能性、成長可能性があるもの」と定義しています。



県学力・学習状況調査では、「非認知能力が毎年の学力に影響を与え、その影響が積もって学力に差が生まれてくる可能性」も指摘されています。学校では、「育成したい資質・能力」を「非認知能力」にターゲットを絞ることが有効で、全教職員で計画的に取り組むことが重要です。学校の実態を的確に把握し、学級経営をはじめとした学校教育全体で、一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識しながら学習できる環境をつくりましょう。

参考 「家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成」OECD
 「生徒指導リーフ Leaf.1」国立教育政策研究所
 「埼玉県学力・学習状況調査 調査報告書」「教師となって第一歩」
 「I's 2019」埼玉県教育委員会



「学びのR」
 はこちらからも
 御覧いただけます！